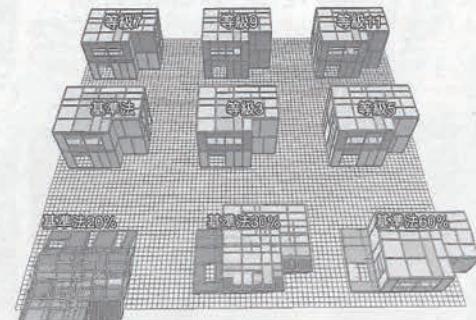


能登半島地震の地震動で耐震シミュレーション

耐震性の重要性を訴求

中川貴文京都大学准教授

中川貴文京都大学准教授は、能登半島地震の被害を受けて、自身が開発した木造住宅の耐震シミュレーションソフト「ウォールスタット」に1月1日の地震動を使ってシミュレーションをした。シミュレーションは建築基準法で求められる壁量に対して20%から、100%、耐震等級3、5、7、9、11相当(耐震等級3以降は仮想)で実施。基準法レベルのモデルは倒壊せず基準法の求める必要壁量を満たしていくことの重要性を示した。



能登半島地震の地震動で、ウォールスタットでシミュレーションした結果

中川准教授は2016年の熊本地震でウォールスタットによる倒壊シミュレーションを実施。現地調査もしている。16年は国土交通省国土技術政策総合研究所に所属しており、公的な立場での取り組みだった。

七尾市、志賀町などを対象にした京都大学生存圏研究所研究室の調査に同行した。中川准教授は「熊本地震の益城町と同じように激しい被害があり、広範囲に及んでい」という。そのなかでも比較的新しい宅地では被害が少なかったが、輪島市では海岸線が隆起している所、珠

洲市では海岸線から数百メートルまで津波が押し寄せたことも確認できた。また、07年にウォールスタットで解析して損傷のなかった住宅が被災地であり、今回の地震でも損壊を免れたことを確認できたという。中川准教授は「ウォールスタットによる耐震シミュレーション

などを通じて、耐震性の重要性をこれからも発信していきたい」と話している。

能登半島地震の被害を受けて、自身が開発した木造住宅の耐震シミュレーションソフト「ウォールスタット」に1月1日の地震動を使ってシミュレーションをした。

シミュレーションは建築基準法で求められる壁量に対して20%から、100%、耐震等級3、5、7、9、11相当(耐震等級3以降は仮想)で実施。

